

つぼみ

本城まい子



かくれんぼしていたクロの背中に小さく光るものひとつ。

それは、しゃらんしゃらんと光を放つ種でした。

「学校へもって行って、植えてあげよう」

畑のやわらかい土と、おけをもち、みんなはあぜ道をすすみます。



「お花かしら」

リッカちゃんがじょうろを手にとってきました。

「大根かもね」

冷たい水をひとりじめして、キピがからかいます。

とびきりおいしい土に、とびきりおいしい水、
とびっきりおいしいお日さんの光が、種にそそがれました。



種は芽を出しぐんぐん大きく、しっとり立派なつぼみをつけました。

「いつ咲くのかな、どんな花が咲くのかな」

楽しみな気持ちはみんないっしょです。

毎日、観察日誌をつけました。

日誌を見て、ものしりクロや学校の先生はこう言います。

「きっと明日には花が咲くよ」



ところがつぼみは、何日たってもひらきませんでした。

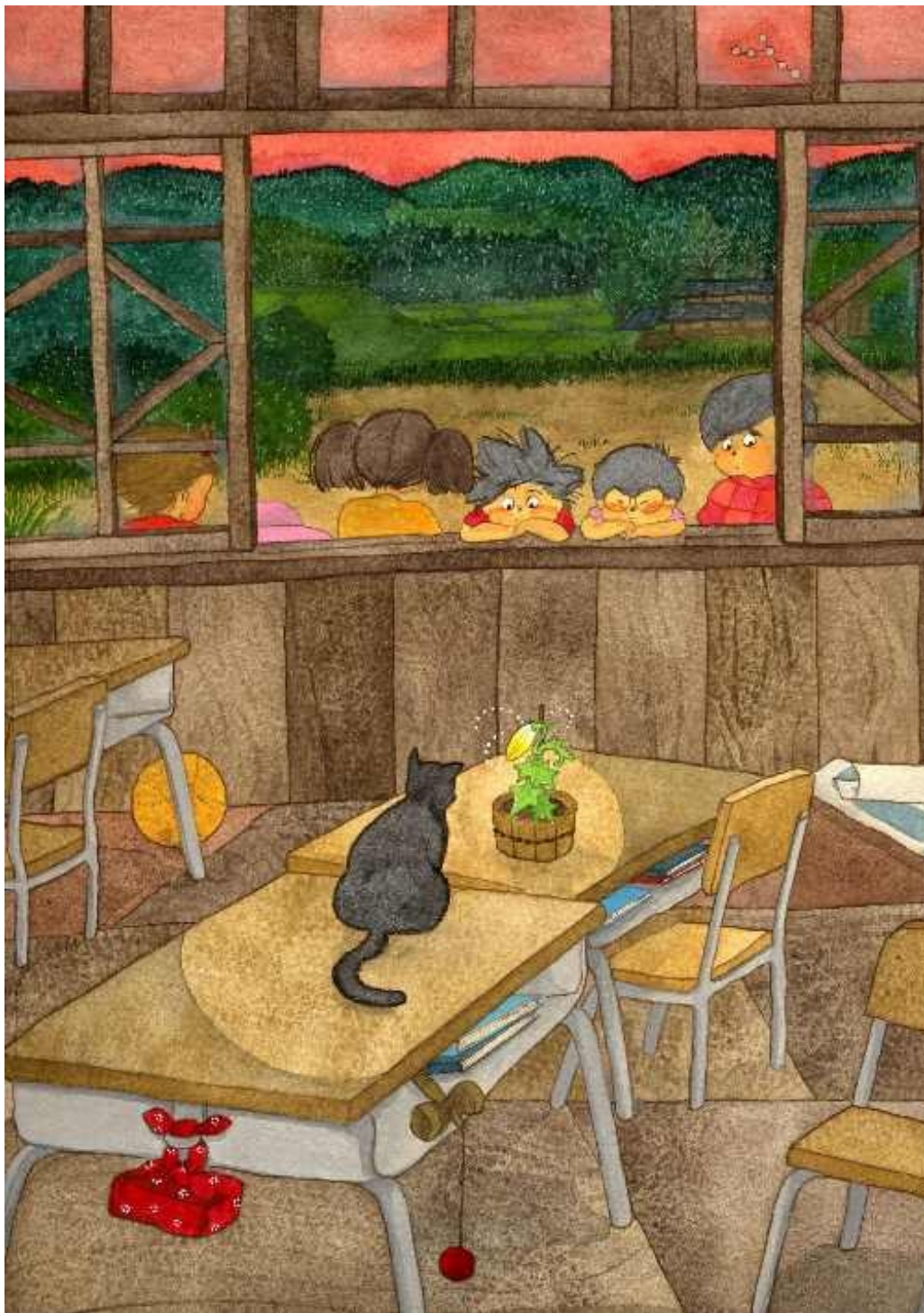
「病気なんじゃないかな」

みんなから相談をうけ、クロがつぼみに話を聞くことになりました。

「どうして花を咲かせないの？つぼみのままじゃ、ずっと真っ暗でしょう。」

つぼみは、小さいけれどきっぱりとした声で言いました。

「わたしはずっとつぼみでいたい。そとのせかいなんていやなことばかりにきまっているのだから」



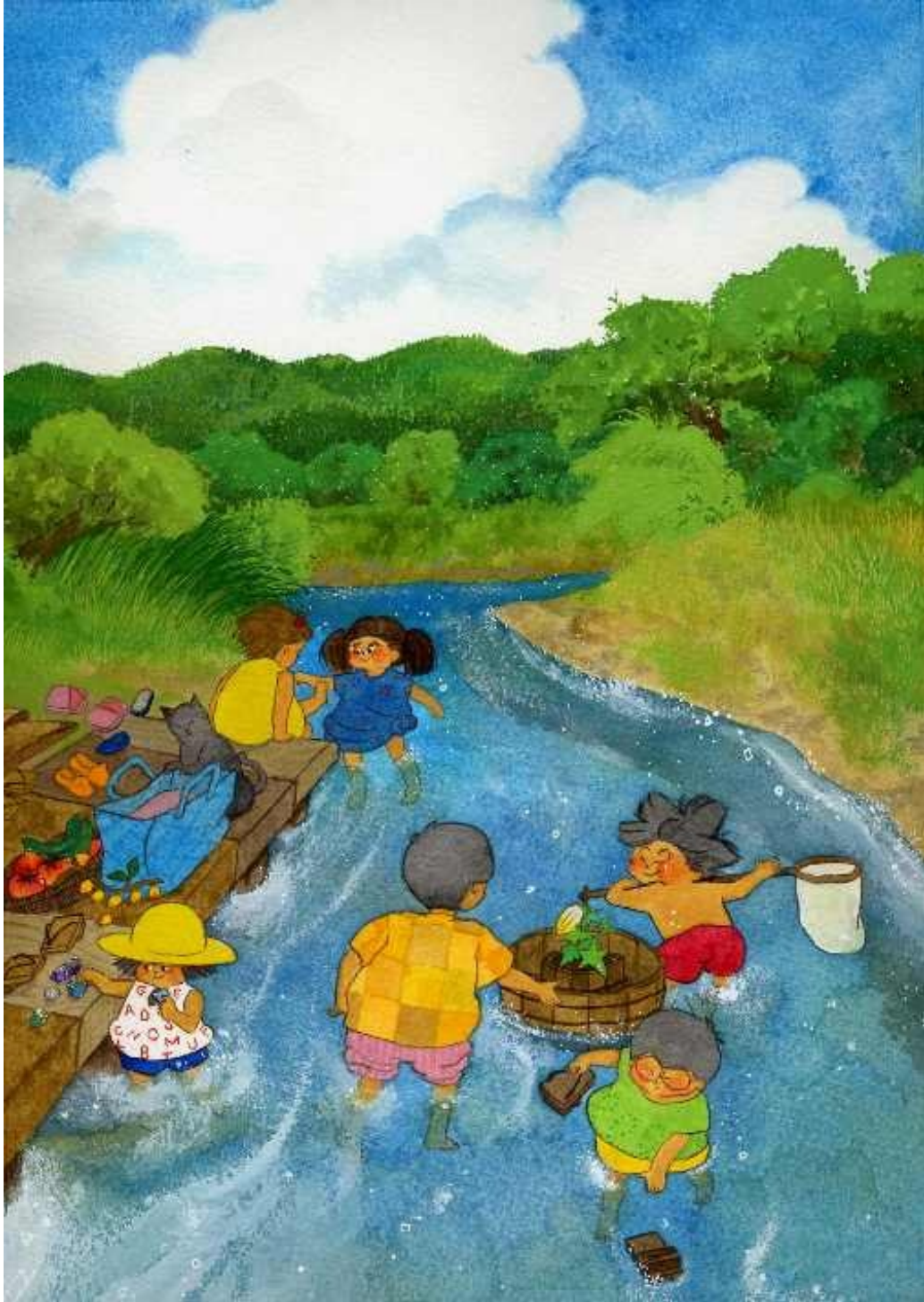
みんなはつぼみを外へつれて行きました。

「ほら、きらきらしてて冷たくって気持ちいいよ。川はいつか海まで流れていくんだ。ね、ちょっと見てごらん」

ゴロちゃんはおけがひっくり返らないようおさえながら、優しく話しました。

「いやいや、じめんがこんなにゆれてる」

川の流れと水の音に怖くなったつぼみは、ぎゅっとかたくなってしまいました。



豊かに実った田んぼでは、白鷺が雲そっくりに飛んでいきます。
「飛び立つ鳥は恰好いいよ。風も草もあま〜い、いいにおいがするんだから！見てみなよ！」
アジがつぼみを抱えて、とびはねながら言いました。
「いやいやそんなおおきなけもの、こっちへこさせないで！」
鳥が、自分を食べにくると考えたつぼみは、いっそうかたく閉じこもりました。



「とびきり可愛くしてあげる」

リッカは花嫁さんがするように、レースを上からそっとかけました。

「立派に飾ってあげるわ」

ミモザは汚れてしまったおけを、きれいに飾りつけました。

「ねえ、きれいになった姿を、ちょっと見てみたらどうかしら？」

2人はにっこり話しかけましたが、つぼみは、

「どんなにかざっても、いつかはよごれて、かれちるんでしょう」

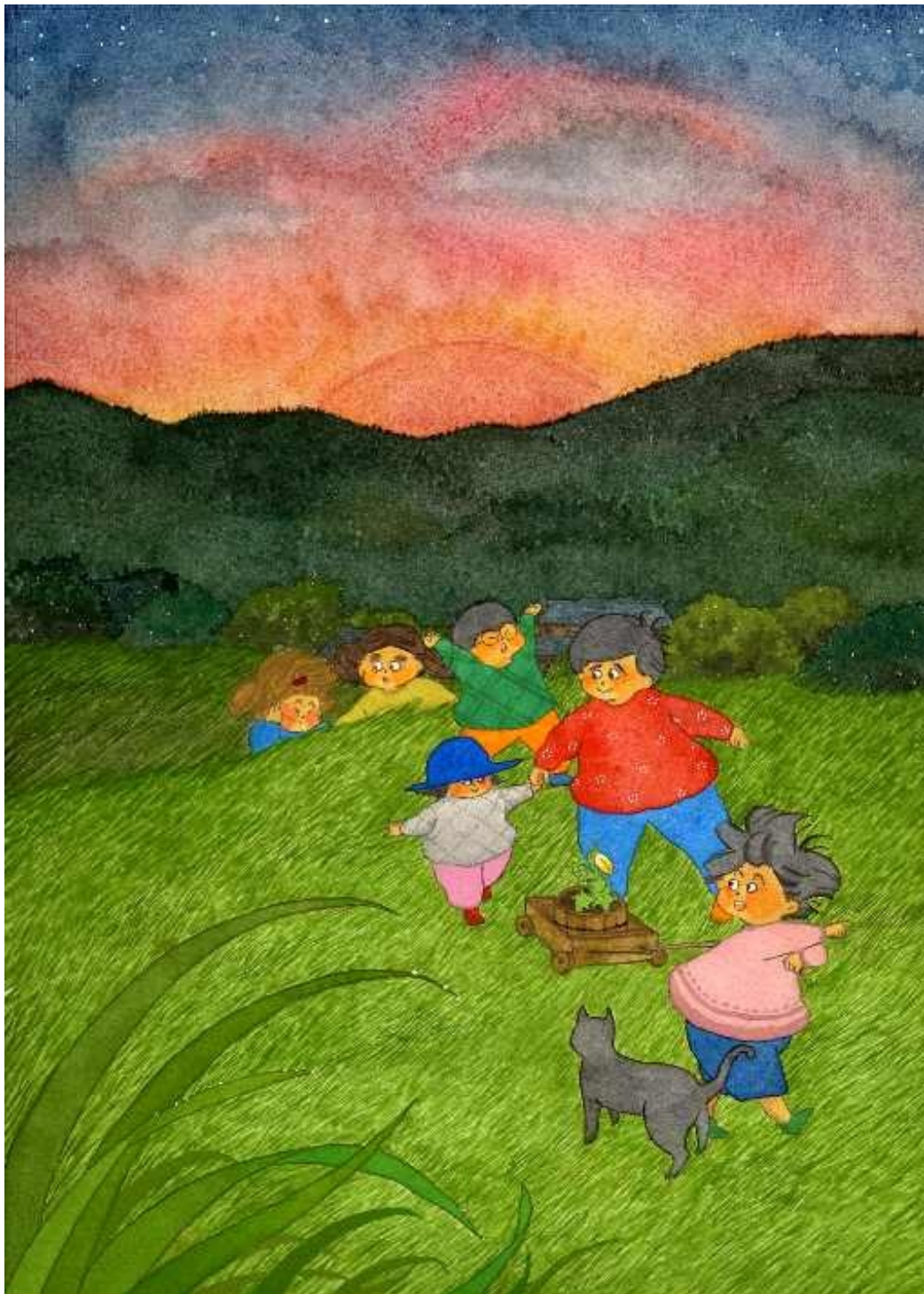
そう言うと少し萎れてしまいました。



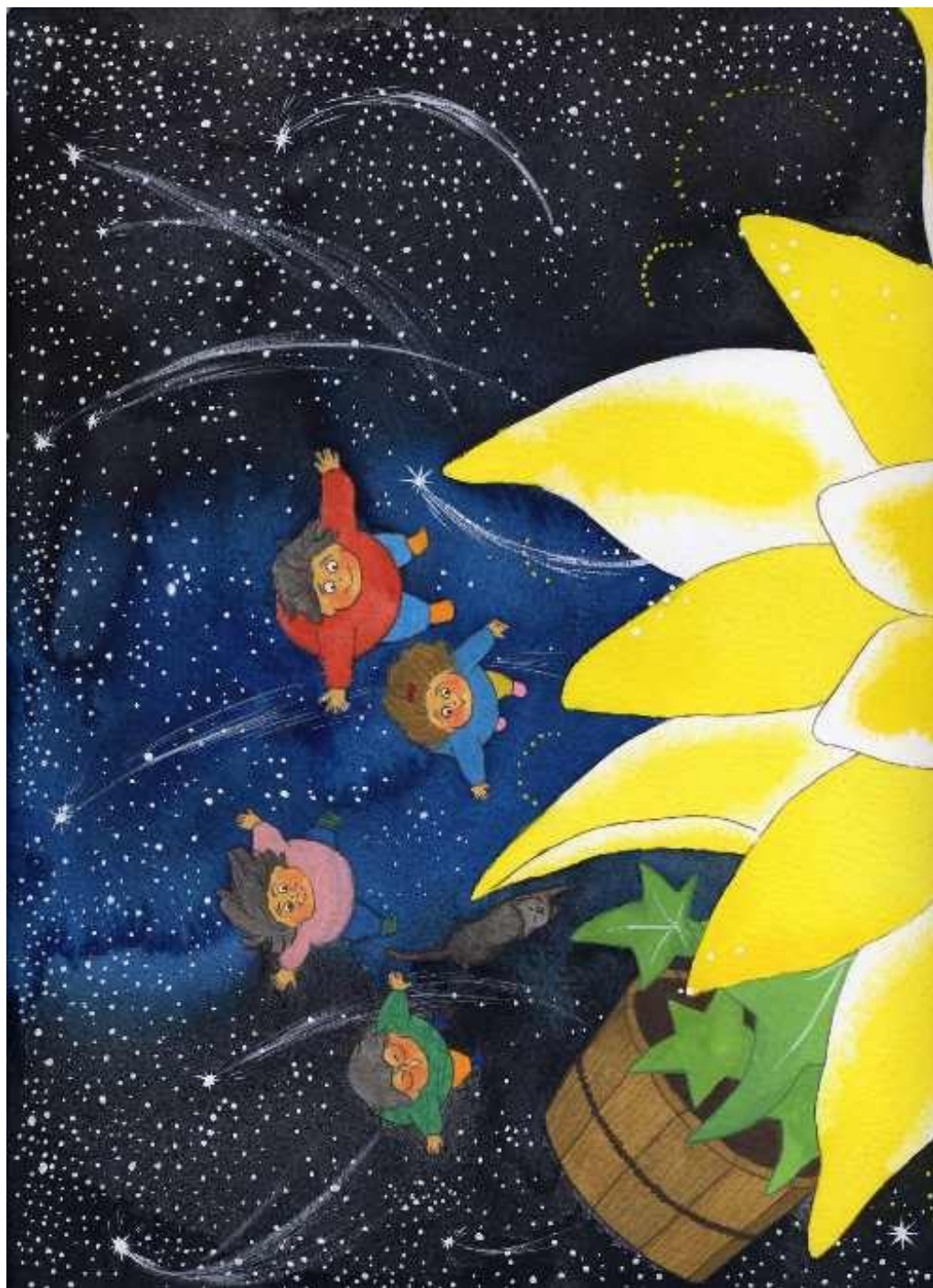
どんどん元気のなくなるつぼみをつれて、みんなは山へ登ります。
すっかり風は冷たくなり、秋の虫たちが歌いだす季節になっていました。

「今夜はとってもめずらしい星の雨が降るんだよ。見てみたくない？」
クロがないしょの話をするように、小さく声をかけました。

優しいお月さんの光と、星たちの瞬きを、つぼみはくらやみでも感じられました。
そして、そうっと そうっと 花を開いたのです。



「さいた！」



「きれい、きれい、そとのせかいはこんなにも、きれいだったのね」

月よりも星よりも光り輝いて咲いたつぼみは、
ずっとそばにいてくれたみんなに 『ありがとう』 を言おうとしました。

そのときです、



ぱらん

ぱらん

声が、出ませんでした。



ぽろり

ぽろり

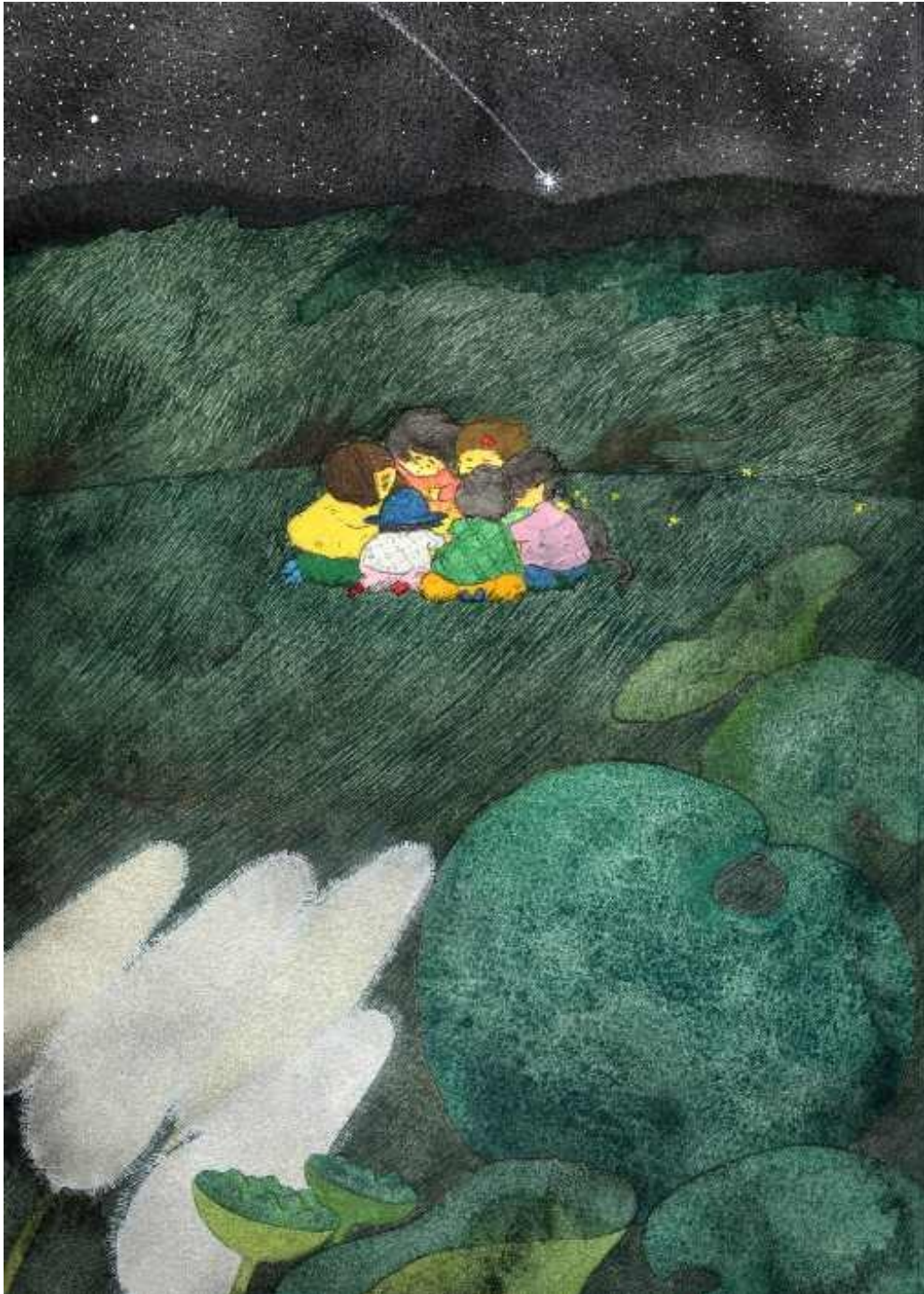
長くつぼみのままでいたからでしょうか、花は、弱っていました。

ぱら ぱら ぱら ぱら ぱら

ありがとう、と小さく言うと、枯れて散ってしまったのです。

みんなはだまって見送りました。

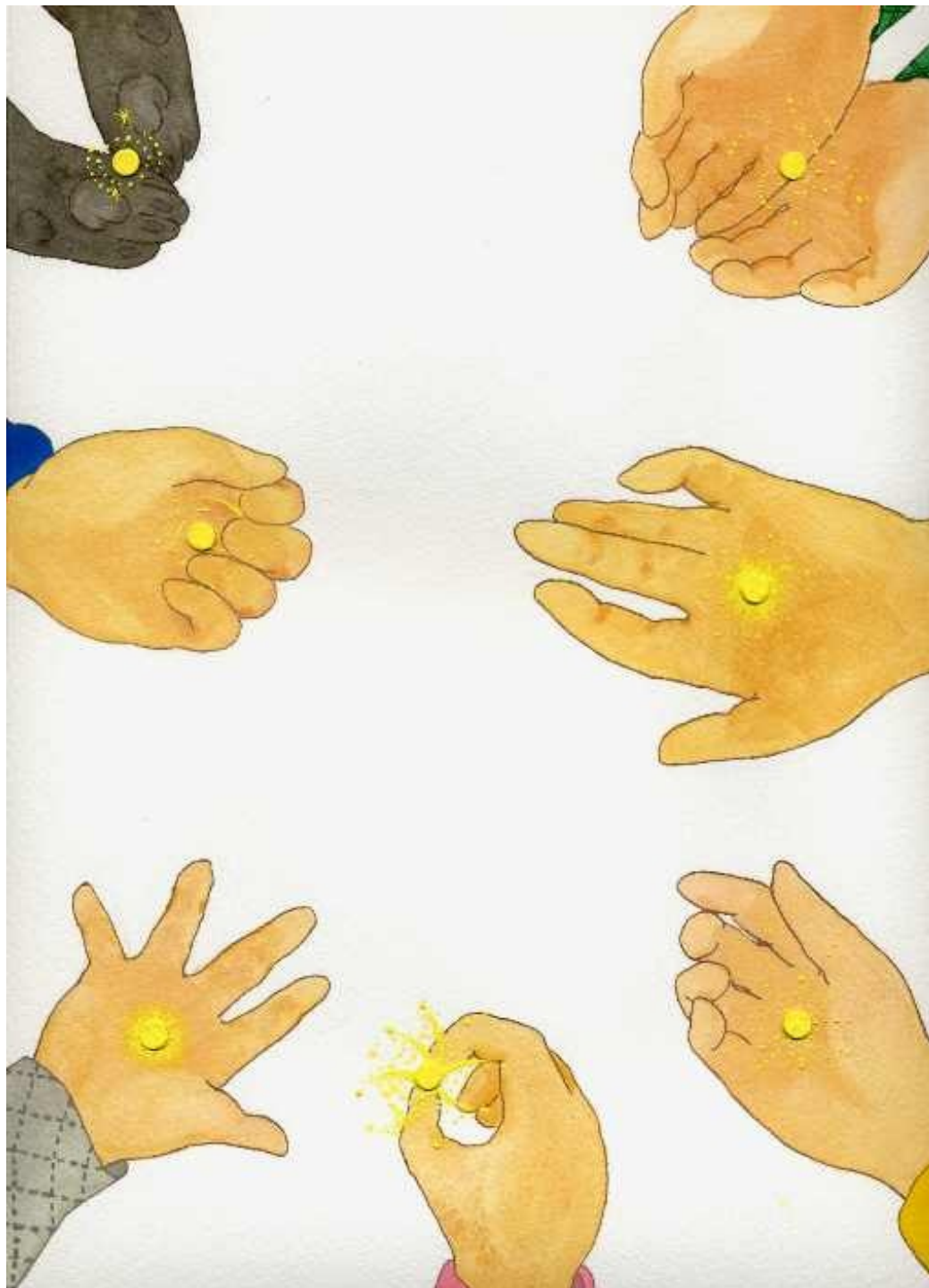
花の姿を忘れないように、いっしょうけんめい、泣くのをこらえて見送りました。



冬が過ぎ、また温かい季節になりました。

「芽が、出たよ」

散っていった花は、7粒の種を残してくれていたのです。
種は、あの夜の流れ星のように手の中でずっとずっと光り続けていました。



「みんな、みんな、芽が出たよ！」

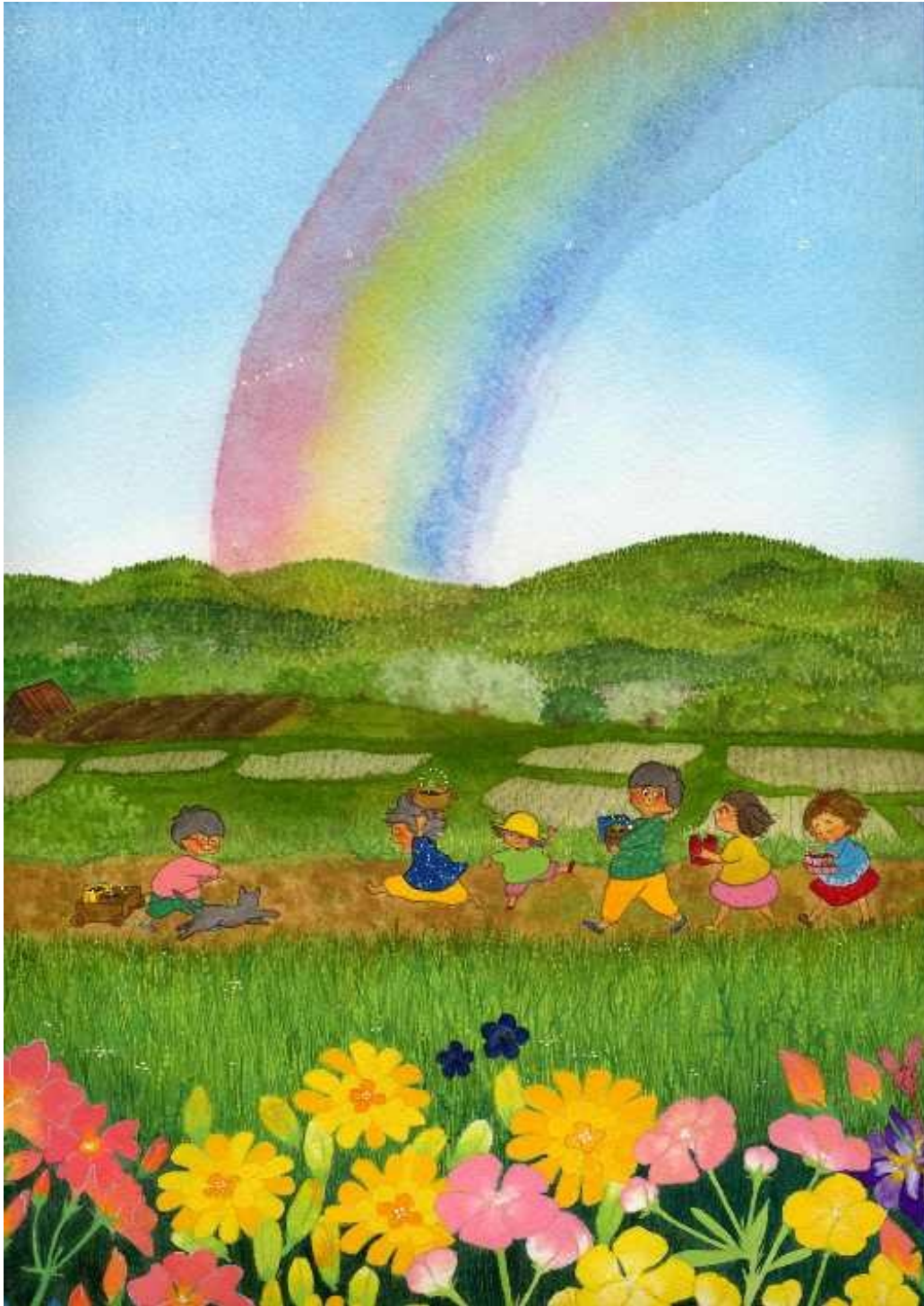
また、あえるかな？

「ねえ、あの花にまた会えるかな？」

そのつぶやきは誰かの声とかさなるように、空へと消えていきました。

「あえるよ。きっとまたあえるよ」

遠くで虹が、そう言った気がしました。





ありがとうございました。
わたしは、わたしの花を大切にしてください。
本城 まい子

